

一八八四年一月二日(水)

ドブキネーシヨル
南神村で信者たちと共に——タントラ派の信者との対話

今日はポウシユ白分四日目。キリスト暦一八八四年一月二日。ベンガル暦一二九〇年ポウシユ月十九日、水曜日。

聖ラーマクリシユナはドブキネーシヨル南神村のカーリー神殿に信者たちといっしよに住んでいらっしやる。このころは、ラカール、ラトウ、ハリシユ、ラームラル、校長(モニ)の五人がドブキネーシヨル南神村に住んでいる。

時間は三時を打ったところ。モニはタクールのお姿を拝しようと、ベル樹台タラから聖ラーマクリシユナの部屋に来た。タクールは一人のタントラ派信者といっしよに西側ベランダにおられた。

モニは入って床に額ぬかずいてごあいさつブラナーム申し上げた。タクールは彼に、「自分のそばに来て坐るよう——」とおっしゃった。タントラ信者との会話を聞かせることによって、モニに何ごとかを教えようというおつもりらしい。マヒマー・チャクラバルテイが、タントラの信者をタクールに会わせるべく送ってよこしたのである。タントラ信者は赤土色の衣を着ていた。

聖ラーマクリシユナ(タントラ信者に向かつて)——

「頭蓋骨でつくった容器コップから酒を飲むのも、タントラ派の修行の一つになっているね。あれはカーラ

ナ・バリというんだろ、え？」

タントラ信者「さようでございます」

聖ラーマクリシユナ「十一個の容器コップで——。そうじゃなかったかい？」

タントラ信者「三トラ(35)飲むのが規準きまわでございます。死体の上に座つてする修行のときに——」

聖ラーマクリシユナ「わたしはまた、酒がちつとも飲めないんだよ」

タントラ信者「あなた様は、真底からの歡喜よろこび(サハジャーンナダ)をもつお方です。そのよろこびが得られたら、他の何ものも必要ではございません！」

聖ラーマクリシユナ「それにわたしは、称名じやまも苦行もあまり好きじゃないんだ。だが、いつも神のことを想っているよ。ところで、六チャクラというのは、ありや何のことだい？」

タントラ信者「はい、あれはみな、いろんな聖地のようなものでございます。一つ一つのチャクラにシヴァとシャクティが住んでいます。肉眼では見えませんし、体を解剖しても取り出すことはできません。チャクラの蓮の茎はシヴァリング(男根)に、子房には根元造化力アデイヤシャクティが女陰ヨニーの形をして存在します」

モニは黙つて聞いていた。モニの方を見ながら、聖ラーマクリシユナはタントラ信者に質問なさる

聖ラーマクリシユナ「タントラ信者に向かつて、うん、それで、बीジャ・マントラの助けがなくて真理かみを覚れないものかね？」(訳註、बीジャ・マントラ——बीジャは種子の意味で、このマントラを称えらると、種から芽が出て大きな木に育つように、靈性修行を助ける秘密の眞言マントラである。師グルから直接、弟子に授けられる)

タントラ信者「いえ、そんなことはありません。信じることによって——師グルの言葉を信じればよろしいのです」

聖ラーマクリシュナはモニの方を向いて、タントラ信者を指しながらおっしゃる——
「信じること！」

タントラ派の信者が立ち去ると、ブラフマ協会のジャイゴパール・セン氏がやってきた。聖ラーマクリシュナは彼と話をしていたらっしゃる。ラカール、モニたちがそばにいた。午後——。

聖ラーマクリシュナ「(ジャイゴパールに向かつて)どんな人をも、どんな考え方をも悪く思つてはいけないよ。無形の神を信じる人、人格神を信じる人、みんなあの御方の方へ向かつて進んでいるんだし、智者ジニヤトもヨーギーヨーギーも信仰者バクタクもみんな、あの御方を探しているんだからね。智慧の道の人はその御方をブラフマンというし、ヨーギーたちはアートマンとか至上パラトマン我とかいうし、信仰者たちは至聖サガアンと呼ぶし、また、永遠のタクールタールと、永遠の召使いカマがあるとも言う」

ジャイゴパール「すべての道が真実であるということが、どうしてわかるのですか？」

聖ラーマクリシュナ「一つの道を正しく進んでいけば神様のところに行ける。そうなればあらゆる道の消息コトがわかるんだよ。ちょうど、何かの方法で屋根に上がつてしまったようなものでね、木のハシゴでも下りられるし、石の階段でも下りられるし、一本の大綱ロープをつたつても下りられる。

あの御方の恵みがあれば、信仰者は何でもわかつてしまう。あの御方を一たびつかまえたなら、すべてのことがわかるようになるよ。一度、何とかして大旦那に会つて話をする事ができたら、そのと

きは大胆那自ら話してきかしてくるよ。いくつ庭があるとか、池がどんなだとか、株券はどれ位あるとか……」

〔神を見る方法〕

ジャイゴパール「どんなふうになれば神の恵みを受けられるのですか？」

聖ラーマクリシュナ「いつもあの御方の名を称えたり、讃えたりしていること。世俗的な考えを出るだけ捨てること。お前が作物をつくるために苦勞して畑に水をひいてきても、途中に穴があいていたらみんな水は洩れてしまふだろう。溝を掘って水をひくようにしたことが、全くの無駄骨折になってしまう。」

心が清まつて俗世への執着がなくなれば、神への熱愛が生まれる。そうなれば、お前の祈りは神のそばに届く。電線が切れていたりこんぐらがつていたりしては、電報は通じないよ。

わたしはたった一人で、ほんとに夢中になって泣いたものだ。ナーラーヤナはどこにいる^グといて泣いたものだよ。泣き泣き意識が失くなってしまったものさ——^{マハレグアージュ}気の流れに溶けこんで！

ヨーガ(神との合一)はどうしたら成功するか？ 電線に邪魔が入ったり切れたりしていなければ電報は届く。俗世への執着をキレイに捨てることだ。

何の欲得もなくすることだ。欲得が残っているのは^{サカマ・バクテイ}ご利益信仰だよ！ ^{ニジュカマ・バクテイ}無私の信仰をアヘイトキー・バクテイ(結果を求めない信仰)と言うんだ。お前が私を愛しているかどうかなど、どうでもいい。とに

かく、ただ私はお前を愛している——これがアヘイトキード。

とにかく、あの御方を好きになることだ。大好きになれば会える。妻が夫にひかれる念、母親が子供にひかれる念、社会人が自分の仕事にひかれる念——この三つの念力が一本になってあの御方に向けられたら見神できる」

ジャイゴパールは世俗的な人物である。それで、聖ラーマクリシュナは彼にふさわしい教訓を与えられたのだろうか？

智慧と分別の道——信仰のヨーガとブラフマン智

夜の八時頃。タクール、聖ラーマクリシュナは自室で坐つていらつしやる。部屋にはラカールとモニがいる。モニは今日で、師のもとに滞在すること二十一日目である。

タクールはモニに、神や真理について推理考察することを禁じておられる。

聖ラーマクリシュナ(「ラカールに向かつて」あんまり考えることはよくない。先ず第一に神、それから世界だ。あの御方をつかんだら、あの御方の世界の消息もちゃんとわかつてくる」

モニとラカールに向かつて——

「ジャドウ・マリツクと知り合いになれば、あの人にどれだけ家屋敷や庭園や株券があるか、みんなわかつてくる。

だからこそ、聖者たちはヴァールミーキに、マラ、マラと称えるようにお命じになったのだ。

これにはわけがある。ムマは神を意味するし、ムラは世界を意味している。つまり、先ず神、次に世界、ということだ」

〔クリシユナキシヨルとムマラの真言について話す〕

「クリシユナキシヨルが言うには、ムマラ、ムラは清浄のマントラだそうだ。リシがさずけてくださったのだから——。ムマは神、ムラは世界のことだ。

だから、ヴァールミーキのように、先ず何もかも捨てて、一人で住んで、夢中になって泣きながら神を呼ぶことだよ。先ず第一に必要なのは、神を見ることがだ！ それから、いろいろ考える。——お経のことだの、世界のことだの——」

〔タクール、道で泣いたこと——マーよ、考える頭に雷を落としておくれ（一八六八年）〕

モニに向かつて——

「だから、お前に言うんだよ、もう考えちゃいけないと。ジャウ樹台^{タラ}から、これを言おうと思ってやって来たんだ。あまり考えてばかりいると、しまいにはダメになる。しまいにはハズラーのようになってしまふぞ。わたしは夜ひとりで泣きながら歩いて、こう言ったものだ——『マーよ、わたしの考える頭に おそろしい雷を落としておくれ』と。

お前、もう二度と、よけいなことを考えたりしないと見え」

モニ「はい、もういたしません」

聖ラーマクリシユナ「信仰があれば、それですべては得られるんだよ。ブラフマン智が欲しい人も、信仰の道歩きつづけければ、そのブラフマン智だつて手に入るんだ。

あの御方の恵みを受けているのに、智慧が不足のままではいるはずがないだろう？ 郷里^くで米^はを量^はつているとき、一山はかり終えると、すぐ次の山が押し出してくるんだ！ 大実母^マは次から次へと智識の山を押し出してくださるよ」

〔パドマローチャンのタクルルに対する信仰——五聖樹^{パンチャパテイ}の杜で修行のとき祈つたこと〕

「あの御方をつかんだら、学者など実につまらんものに見えるよ。パドマローチャンは言っていた。あなたといっしょに漁夫の家である集会に行つたとて、それが何でしょう？ あなたといっしょなら、死体を焼く賤民の家で食事をすることもできますよ！（訳註——普通バラモンは、低カーストの家へあがることはしない）

信仰を通じて、すべては得られる。あの御方を愛することが出来たら何の不足もない。バガヴァティー（大実母の一名のそばにはカルティカとガネーシャが坐つていらつしやつた。あの御方^マは寶石の首飾りをしていなすつた。マは二人の息子に、『この宇宙を先に一まわりしてきた者にこの首飾りをあげよう』とおつしやつた。カルティカはすぐさま自分の乗り物である孔雀に乗つて出発なすつた。ところがガネーシャはゆつくりとマの周囲^{まわり}を一まわりして、ていねいにおじぎをした。ガネーシャ

は、マーの中に宇宙があるということを知っていたのさ！ マーは大そう満足なすって、ガネーシャのくびに首飾りをかけてくださった。長いこと経ってカルティカが戻ってきてみると、兄さんが宝石の首飾りをかけて坐っていた。

わたしはマーに向かって、泣き泣き頼んだものだよ——『マー、ヴェーダやヴェーダーンタには何が書いてあるのか、わたしに教えておくれ』——『ブラーナやタントラに何が書いてあるのか、知らせておくれ』——あの御方は一つ、一つ、わたしにみんな教えてくださったよ。

あの御方はわたしに、みんな教えてくださった。どんなに、いろいろ見せて下さったことか！

〔タクルルが修行中に見たもの——シヴァとシャクティ、頭蓋骨の山、グルは舵手、サッチダーナ—
ンダの大海〕

「ある日のこと、見せてくださった。あたり一面、四方八方にシヴァとシャクティがいるんだ。シヴァとシャクティが交接まじわっているんだ。人間、あらゆる動物や草木、全部の中に、あのシヴァとシャクティがいるんだ！ ブルシャ(男性原理)とプラクリティ(女性原理)！ その二つの交接まじわり！

また別の日に見せてくれたのは人間の頭蓋骨の山！ シャレコウベの山脈だ！ ほかに何もないんだ！ わたしはその中に、たった一人で坐っているんだ！

それから見せてくださったのは——大洋おおうみ！ わたしは塩人形になって海の深さを測りにゆく！ そのとき、グルの恵みでわたしは石に変えられた！ ——見ると汽船が一そう——すぐに乗りこんだ！

1884年1月2日(水)

グルは舵手だ！(モニに向かつて)——サッチダーナンダのグルを毎日呼んでいるかい？」

モニ「はい、おっしゃる通りにしております」

聖ラーマクリシュナ「グルの舵取り。そのとき見た。わたしは一つのもの、お前はもう一つのもの。それから飛びこんで海に入ったら魚に変えさせられた。わたしはサッチダーナンダの大海で楽しく泳いでいた。

これはみな、とてつもなく神秘的な話なんだよ！ 頭で考えたって何がわかる？ あのお方が会ってくだされば、すべてはわかることだ。わからないことなんか、何もなくなるよ」